



騷乱の時代に歌人となった武士 西行（1118—1190）

### 欲望の渦巻く王朝

どのような国家にも企業にも組織には栄枯盛衰を回避できない宿命があります。紀元前六六〇年に神武天皇が即位されて以来、二七〇〇年近く、一二六代の天皇が一系で存続してきたとされる日本は世界でも稀有な存在ですが、それでも何回も存続の危機に直面しています。その一回が三九〇年近く継続した平安時代から鎌倉時代へ移行した時期です。その主要な原因は企業の存続にも共通する縁故主義（ネポティズム）でした。

平安時代後期の太政大臣であった藤原道長の「この世をば／我が世とぞ思う／望月の／欠けたることも／なしと思へば」という和歌が象徴するように、道長は天皇一家との姻戚関係で第六代一条天皇から第七代堀河天皇まで八人の天皇を一族から誕生させています。その一人である第七二代白河天皇も源平合戦で入水する第八一代安徳天皇まで九人の天皇を姻戚関係から輩出し、絶大な権力を維持していました。

この白河天皇は一〇八七（応徳三）年に第三皇子である八歳の善仁親王を第七三代堀河天皇とし、自身は上皇として院政を実施し政治を牛耳ります。そして自身の身辺を警護するため住居である仙洞御所に北面武士を常駐させる体制を整備しました。堀河天皇の皇子である第七四代鳥羽天皇が一一二三（保安四）年に退位して上皇となっていた時期に、一八歳で北面武士として出仕したのが、今回、紹介する西行です。

## 北面武士から僧侶へ転向

出家する以前の俗名が佐藤義清の西行は武士であり、天皇を警護する役職であった佐藤康清の子供として一一一八（元永元）年に誕生しました。天皇から紀伊国田仲莊（現在の和歌山県紀の川市）を領地として付与されており、そこで西行は誕生したと推定されています。一一三五（保延元）年からは北面武士として出仕します。その時期には平治の乱に勝利して太政大臣になる同年の平清盛も北面武士として出仕していました。

ところが六年が経過した一一四〇（保延六）年に突然、義清は出家して西行と名乗るようになります。二三歳でした、その動機には諸説ありますが、親友が死亡したという理由や、高貴な女性に失恋したという理由が推定されています。さらに仏教への信仰が社会に流行していたことも影響しているかもしれません。当時、仏法は王法より上位にある、すなわち仏教は政治より重要であるとされ、僧侶は関所の通行も自由でした。

実際、一一二四（保安五）年に白河法皇は高野山に行幸しているし、翌年には鳥羽上皇などととも熊野大社にも参詣しています。さらに帰幸の直後には殺生の嚴禁を発令します。一一二七（大治二）年には再度、法皇と上皇は高野山に行幸しています。このような社会の風潮とともに、平忠盛が瀬戸内海の内海海賊の首領を逮捕する功績があり、その子供で西行と同業の清盛が出世したことも出家に影響したのかもしれませんが。

さらに西行に影響をもたらしたのは京都の嵐山にある法輪寺に空仁という僧侶を訪問したことです。連歌の達人でもあり素晴らしい人柄にも魅了され、何度も訪問するうちに出家の意思を堅固にしていきます。そして「惜しむとて／惜しまれぬべき／この世かは／身を捨ててこそ／身をも助けめ」という覚悟を表明した一首とともに一一四〇年一〇月に出家し、年末から鞍馬の奥地に生活するようになります。

## 白河以北の陸奥を行脚

鞍馬での生活は「わりなしや／氷る笥の／水ゆえに／思い捨ててし／春の待ちたる」という状態でしたが、出家した翌年の一一四一（永治元）年に宮中で異変が発生しました。鳥羽上皇が出家して法皇となり、崇徳天皇を廃位にし、三歳の実子を近衛天皇にしたのです。そこで崇徳天皇の母親の待賢門院（藤原璋子）（図1）は出家することになります。さらに一一四五（天養二）年に璋子が逝去し、西行の人生に影響をもたらします。

出家してしばらくは京都周辺の東山、嵯峨、鞍馬などの草庵を転々としながら生活していましたが、その時期に陸奥を行脚しています。陸奥という文字が象徴するように、現在の福島県白河市にある白河の関所以北は「みちのく」と名付けられ、朝廷の権力の域外です。そのような地域を指した理由は明確ではありませんが、一説では待賢門院もしくは鳥羽天皇の皇后である美福門院（図2）に失恋したことが原因とされています。



図1 待賢門院（藤原璋子）  
（1101-45）



図2 美福門院（藤原得子）  
（1117-60）

この時期の西行の行動は明確ではなく、生涯に約二三〇〇首の和歌を制作している多作の作家が「白河の／関屋を月の／もるからに／人の心を／とむるなりけり」という一首のみしか伝承されていないことも沈滞した気持ちであったことを推察させます。作家の富士正晴は西行の伝記に、この和歌は空洞のようで感動のない閑散とした印象をもたらすと記載していますが、失恋の旅路と理解すれば、納得できる風情です。

### 崇徳上皇の御陵を訪問

陸奥の行脚から帰京した西行は、これも明確ではありませんが、一一四九年頃に高野山に移動したとされます。三二歳でした。この五月に落雷によって高野山の金堂や金堂が焼滅しており、宮中に人脈のある西行は再建のための勧進の役割を期待されたと想像されます。この前後から、天皇の地位さえ政治に利用する長年の勝手な縁故主義の宮中人事の破綻が表面に噴出してくるとともに、京都は何度も火災に見舞われます。

このような災害も加勢して白河上皇の専横による宮中人事の崩壊の兆候が次第に始めてきましたが、孫の鳥羽上皇の一一五六（保元元）年の崩御を契機に、当然のように発生したのが子供の崇徳上皇と現役の後白河天皇の朝廷の勢力が二分して衝突する「保元の乱」でした。合戦は数日で後白河天皇側の勝利で決着しました。崇徳上皇は讃岐に配流され、多数の貴族は幽閉や流罪、武士は斬刑とされました。

西行は讃岐に配流された崇徳上皇には頻繁に和歌を送付していました。一例として「その日より／落つる涙を／形見にて／思い忘るる／時の間もなし」という上皇への追慕の気持ちを表現した一首もあります。しかし一一六四（長寛二）年に上皇は配流の土地で四六歳の人生を終了します。そして三年が経過した六七（仁安二）年に西行は四国へと旅立ちます。親友の僧侶の西住と同行の予定でしたが、都合ができ出発は一人でした。

四国を目指した経路は明確ではありませんが、記録されている和歌から推定すると、岡山の見島あたりから瀬戸内海の塩飽群島を経由して四国に到着したようです。四国での旅程も明確ではありませんが、四国霊場八一番札所になっている白峰寺にある崇徳院陵（図3）に参詣しているようです。この参詣については「よしや君／昔の玉の／ゆかとても／かからむ後は／何にかはせむ」という一首のみが記録されています。

江戸時代後期に出版された上田秋成の読本『雨月物語』の冒頭の「白峰」は西行が崇徳院陵に参詣して崇徳上皇の亡霊と対話するという内容ですし、崇徳上皇が怨霊となる場面を描写した有名絵師の錦絵も江戸時代に何枚も製作されており（図4）、「保元の乱」は有名な史実でした。上皇は歌人としても評価されており、小倉百人一首には「瀬をはやみ／岩にせかるる／滝川の／わかれても末に／あわむとぞ思う」が採択されています。



図3 崇徳院陵



図4 崇徳院（歌川国芳）

## 最後の奉公の旅路

このような時期から平氏、とりわけ統率する清盛の強引な挙動が顕著になります。一一六七（仁安二）年には太政大臣となり、七一年には長女の徳子を後白河法皇の猶子として高倉天皇に入内させ、翌年には皇后にします。そして七八年に誕生した第一王子の言仁を二歳で第八一代安徳天皇にしました。それとともに京都から現在の神戸市中央区一帯の福原に遷都を意図するという横暴さで、源平合戦の契機となります。

そのような京都周辺の混乱の時期を回避するように、西行は一一八〇（治承四）年に伊勢に移動します。高野山の復興に目処がついたとともに温暖な海沿いの土地に移動したということのようです。ここでは伊勢神宮の神官の歌詠みの仲間と静穏な生活をします。この時期に西行の和歌とされる伊勢神宮を題材にした「何事の／おわしますかは／知らねども／かたじけなさに／涙こぼるる」が伝承されています。

しかし、この静穏な生活をしていた西行に重要な依頼が到来します。一一八一（治承四）年の年末、平氏に反抗を表明する南都（奈良）の仏教寺院を討伐するため、清盛の命令によって平氏の軍勢が東大寺や興福寺など仏教寺院を焼討ちにしました。その戦乱で焼滅した大仏殿の再建の勧進を、再興の中心となった大勧進職の重源（図5）から依頼されたためです。そこで西行は八六（文治二）年に陸奥へ旅立つこととなります。



図5 重源（1121-1206）

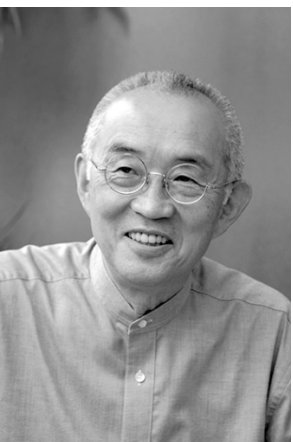


図6 中尊寺金色堂

すでに六九歳になっていた西行にとっては決死の覚悟の旅であり「頼めおかむ／君も心や／なぐさむと／帰らむことは／いつとなくとも」という複雑な心境を吐露して七月に出発しました。途中、鎌倉では創設直後の鎌倉幕府を訪問して頼朝と談話をしており、西行がそれなりの有名な人物であったことが理解できます。それ以後は一

〇月に平泉に到着し、陸奥を支配する藤原秀衡の世話で越冬し、翌年春に帰京しました。

この勧進旅行の成果の記録はありませんが、秀衡の遺骸が中尊寺金色堂(図6)の金棺に納棺されているように、奥州は世界有数の金生産地でしたから成果はあったと想像されます。帰郷した西行は当初、京都の嵯峨に生活しますが、河内国弘川村に移動し、一一九〇(建久元)年に入寂しました。晩年の「願はくは／花の下にて／春死なん／そのきさらぎの／望月のころ」という和歌のように逝去したことも有名です。



つきお よしお 1942年名古屋生まれ。1965年東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授などを経て東京大学名誉教授。2002、03年総務省総務審議官。これまでコンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策などを研究。全国各地でカヌーとクロスカントリースながら、知床半島塾、羊蹄山麓塾、釧路湿原塾、白馬仰山塾、宮川清流塾、瀬戸内海塾などを主催し、地域の有志とともに環境保護や地域計画に取り組む。主要著書に『日本 百年の転換戦略』(講談社)、『縮小文明の展望』(東京大学出版会)、『地球共生』(講談社)、『地球の救い方』、『水の話』(遊行社)、『100年先を読む』(モラロジー研究所)、『先住民族の叡智』(遊行社)、『誰も言わなかった! 本当は怖いビッグデータとサイバー戦争のカラクリ』(アスコム)、『日本が世界地図から消滅しないための戦略』(致知出版社)、『幸福実感社会への転進』(モラロジー研究所)、『転換日本 地域創成の展望』(東京大学出版会)など。モルゲンWEBの連載「清々しき人々」より、『清々しき人々』、『凜凜たる人生』、最新刊『爽快なる人生』(遊行社)など。